

都市在住の中高齢者のクオリティ・オブ・ライフと運動・スポーツ参加

川西 正志*, 山口 泰雄**

Quality of Life and Sports Participation of Middle and Senior Aged Residents in an Urban Community

Masashi KAWANISHI* and Yasuo YAMAGUCHI**

Abstract

The purpose of this study was to investigate the sociological factors which determine the life satisfaction as means of Quality of Life of middle and senior aged residents in an urban community. The data used for this study were collected from a total of 240 men and women participating in three community sports clubs and one social club of an urban community, in Kobe, Hyogo Prefecture in November, 1993. The questionnaire was distributed to a representative of each club and was collected by mail survey. The rate of data collection was 78.3 % and usable data were 188. The Life-Satisfaction Index-A, developed by Neugarten, Havighurst and Tobin(1961), was used to analyze the present life satisfaction as mean of Quality of Life of the sample subjects. A mean score of the total LSI was 9.30. Cronbach's α coefficient was 0.75 which was relatively highly reliable.

The Hayashi's Quantitative Theory I was used to analyze the relationships between sociological factors and LSI. The main results of this study were as follows:

1. Female participants had higher values in the total score and each element's score than their male counterparts.
2. Total score of Life-Satisfaction seemed to be determined more strongly by the demographic, social economic, and physical status factors than by the factor of practical sport participation.
3. Total score of LSI can be determined by both qualitative and quantitative variables in relation to the physical activity and sport participation.
4. Among the most determinant factors of LSI, the gender differences were found in the factors of the self-evaluation of health and physical fitness, and professionalization scale toward play.

key words: *middle and senior aged, QOL, life satisfaction, sport and physical activity, urban community, sociological factors*

* 鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports, Kanoya, Kagoshima, Japan

** 神戸大学発達科学部 Kobe University, Faculty of Human Development, Nada, Kobe 657 Japan

1. 緒 言

今日わが国は、21世紀に到達する超高齢社会への対応が大きな社会的な課題になっている。高齢者を取り囲む経済、医療、福祉などの生活基盤の整備はもとより、定年後も健康で生きがいをもてる社会生活のソフト面の整備が求められている。

生涯スポーツの振興も、高齢社会における人々のアクティブなライフスタイル形成の役割を担っている。特に、高齢期における健康で自立した生き甲斐のある生活は、多くの高齢者が望み、その実現には、中年期からの運動習慣やライフスタイル形成が重要な条件となる。

カナダ・オンタリオ州では、早くから高齢者のためのスポーツや運動の機会を提供すべくシニアエイジのための各種スポーツ大会「シニアゲーム」の開催を実施している。わが国においても、生涯スポーツ振興を図る文部省では「広く国民にスポーツ・レクリエーション活動を全国的な規模で実践する場を提供するため・・・(後略)。」に昭和63年11月山梨県において、開催都道府県、(財)日本体育協会、(財)日本レクリエーション協会、(社)全国体育指導委員連合などの共催で「全国スポーツ・レクリエーション祭」を年に1回(4日間)実施している。これまで、7回実施され、平均参加者は20万人で競技参加者は毎回平均1万3000人で、開催種目はレクリエーション要素の大きいスポーツ種目15種目が実施されている。この種の大会は同時期に始められた厚生省が実施する「全国健康福祉祭(ねんりんピック)」をはじめ、今日では、各都道府県レベルにおいても独自に中高年者を対象とした各種スポーツ大会を実施している。国際的な広がりと比較的競技性の高い「マスターズ陸上」や「マスターズ水泳」なども、中高年者のスポーツ参加の機会を提供している。

中高年期における質の高い健康で生きがいのある生活、いわゆるクオリティ・オブ・ライフ(以下QOLと略す)の確立のために、これまで社会学や老年学などの分野において、スポーツやレジャー活動を含めた社会参加の役割機能が論じられてきた。そうした場合、議論の中心課題は人々

の個人の運動・スポーツやレジャー活動を通じた生活状況を、どのように物的・心身的に評価し満足しているかを知ることであった。

社会学や社会心理学的研究の領域において、一般にQOLとは、個人の生活の質的側面への満足感、幸福感、安定感などを含み、金子(1990)によれば「生活者の意識面を中心に考える立場と、生活者のおかれている環境状態で考える立場の二つに分かれる」とされている。これまで、スポーツ・レジャー活動とQOLに関する社会学的研究では、大半が個人の社会的・心理的態度や価値観に関係する満足度をキーワードとしている。とりわけ生活満足度(life satisfaction)、レジャー生活満足度(leisure life satisfaction)、職場満足度(job satisfaction)を従属変数としたものが多い。

中高年者のスポーツやレジャー参加やレジャー満足度を独立変数とし、生活満足度を従属変数としてその相互関係を検討した研究としては、高齢者のレジャー満足度からアプローチしたRagheb and Griffith(1980)、オートキャンプ旅行者を調査したGuinn.(1980)、中高年者を対象としたKelly(1987, 1988)、退職者を対象としたRussel(1987)、成人から高齢者まで幅広く検討したBrawn and Frankel(1993)等の研究がある。これらの研究の共通点は、スポーツやレジャー参加の量的側面もさることながら、個人の社会経済的地位や能力、健康状態の自己評価、家族や家族以外の人々との社会的相互作用などの主観的満足感としてのレジャー満足度を媒介変数として生活満足度への影響の検討を行っている。このことは、個人のスポーツやレジャー参加が引き金となり、生活満足度への間接的な影響への検討を研究の主たるテーマとしている。

国内ではこれら中高年者のスポーツ参加者を対象とした研究のうち、カナダにおけるQOL指標を用いた岳藤・山口(1991)の高齢者のスポーツ活動とQOL研究や松浦・川西(1992)の女性のスポーツ参加と生活満足度研究、さらに、本研究で対象とする中高年者スポーツ参加者の社会化研究の山口(1991)日本体育協会(1992, 1993)や宮内ら(1992)の研究などがある程度で、まだ萌

芽期の状態である。

今後、中高年者の生活満足度に及ぼすスポーツやレジャーの社会的機能や役割を明らかにすることは、今後の高齢社会に向けて、極めて重要な示唆を得ると考えられる。

2. 目的

本研究の目的は、都市的地域に在住する中高年者の生活満足度に及ぼす運動・スポーツ参加要因を明らかにするとともに、QOL研究の社会的な研究指標についての応用の可能性について検討することである。

これまでの先行研究 (Kelly, 1987; Raghed, 1980; Brawn, and Frankel 1993, 松浦, 川西, 1992ら) から、次のような仮説を導きだし、検証を行った。

- 1) 生活満足度は、人口統計的、社会経済的要因によって強く規定される。
- 2) 生活満足度を規定する要因には、性差がある。
- 3) 生活満足度は、運動・スポーツ参加に関した量的、質的変数によって影響を受ける。

3. 方法

1) 調査方法

サンプルは、表1に示すように1993年11月から12月にかけて神戸市の垂水区団地スポーツ協会(2クラブ: ゴルフ, テニス), 垂水区グラウンドゴルフクラブ, さらに、市教育委員会が開催している老眼大学卒業生でつくる生涯学習サークル, 計4団体のスポーツ・レジャー活動や文化活動に参加している中高年者240名に対して実施された。所定の質問用紙は、クラブ・サークル代表者に対して調査の説明を行った後、代表者によって直接配布回収され、郵送法によって回収された。有効回収率は78.3%であった。

尚、本研究で分析対象となるサンプルは、年齢45歳以上で計188名である。

表1 サンプル

配布数	有効回収数	回収率 (%)
240	188	78.3

2) 調査内容

調査内容は、表2に示すように、1. 属性 (人口統計学・社会経済)、2. 生活満足度、3. 現在の運動・スポーツ実施状況、4. 身体的自己評価の4要因群における計33項目である。

健康体力評価については、それぞれリッカートタイプの5段階尺度を用いた。

表2 調査内容

- | |
|---|
| 1. 属性 (性別、年齢、職業、婚姻、最終学歴)
(世帯収入、所属グループ) |
| 2. 生活満足度 (Life Satisfaction Index-A) |
| 3. 現在の運動・スポーツ実施状況 (種目、頻度) |
| 4. 身体的自己評価 (健康、体力、運動能力) |

生活満足度に関しては、Neugraten, Havighurst, Tobin (1961) が開発した生活満足度指標 A (LSIA) の20項目の日本語訳版を作成し測定した。このLSIAは、1. 興味・関心 (Zest) 6項目、2. 決意と不屈の精神 (Resolution and fortitude) 6項目、3. 目標達成に関する期待と現実の一致 (Congruence between desired and achieved goals) 3項目、4. 積極的な自己概念 (Positive self concept) 3項目、5. 気分状態 (Mood tone) 2項目の5つの要因から構成されている。

3) 分析方法

生活満足度は各項目ごとに「そう思う」「そう思わない」「どちらともいえない」の3つのカテゴリを設け、生活満足度指標の「そう思う」のみに1ポイントの得点を与え、20項目の合成得点を算出し、これをLSIAスコアとした。次に得点化された生活満足度を外的基準とし、他の項目を

説明変数として林の数量化Ⅰ類によって規定要因を検討した。

なお、分析には統計パッケージ SPSS (Statistical Package for Social Science) windows 版を用いた。LSI 項目の尺度の信頼性検定には、クロンバックのアルファ係数、性差の検定は t 検定、年齢別比較には一元配置分散分析を用いた。また、仮説の検証には数量化Ⅰ類を適用した。

4. 結果及び考察

1) サンプルのプロフィール

表 3 は生活満足度に影響を及ぼす独立変数の単純集計結果を示している。性別では、男性がやや多く 69.1% を占め、年齢別に見ると 65 歳以上が約半数を占め、ついで 55-64 歳、45-54 歳となっている。平均年齢は、68.25 歳であった。ほとんどが既婚者 (93.6%) で、職業形態では「退職者」が 38.8% で最も多く、次いで「常勤職」28.2% 「専業主婦」が 21.8% となっている。

世帯収入は「750 万円以上」と答えた者が 31.4% と最も多い。その一方では「350 万円未満」と答えたものも 27.1% あまり見られ、経済状態は年金生活者の経済状態を反映している。最終学歴は「高等学校」が 37.8%、次いで「大学」(21.3%) の順であった。

次に所属グループについて、今回対象としたサンプル数を見ると、「生涯学習」が 28.7% で最も多く、以下「ゴルフ」(27.1%)、「グラウンド・ゴルフ」(24.5%)、「テニス」(19.7%) の順であった。

過去 1 年間によく行った運動スポーツ種目の内容を聞いてみると、スポーツが約半数、次いで個人の体力づくりに行ったウォーキングや体操などフィットネス活動種目が約 3 割であった。それぞれの種目ごとの実施頻度については、フィットネスを目的とした運動が週 3 回以上が 34.1% で最も多く、次いで週 1-2 回が 28.1% と約 6 割の者が週 1 回以上の定期的運動を実施している。また、スポーツ実施頻度についてもほぼ同様の傾向を示している。

自己の健康状態や体力に対する評価は、「健康

表 3. 独立変数の集計結果

アイテム	n (%)	アイテム	n (%)
<属性>		<現在の運動・スポーツ実施>	
性別		運動・スポーツ種目	
男性	130(69.1)	フィットネスプログラム	55(29.3)
女性	58(30.9)	スポーツ	95(50.5)
		その他	38(20.2)
年齢 (平均68.25 歳)		運動実施	
45-54	32(17.0)	週 3 回以上	65(34.6)
55-64	59(31.4)	週 1-2 回	53(28.1)
65-	97(51.6)	2-3 週 1 回	10(5.3)
婚姻		1 年に 6-12 回	10(5.3)
既婚	176(93.6)	1 年に 3-5 回	8(4.3)
死別	11(5.9)	ほとんど	42(22.3)
N.A.	1(0.5)	しなかった	
職業形態		スポーツ実施	
常勤	53(28.2)	週 3 回以上	48(25.5)
退職	73(38.8)	週 1-2 回	56(29.8)
専業主婦	41(21.8)	2-3 週 1 回	14(7.4)
その他	12(6.4)	1 年に 6-12 回	17(9.0)
N.A.	9(4.8)	1 年に 3-5 回	8(4.3)
学歴		ほとんど	45(23.9)
小・中学	39(20.7)	しなかった	
高校	71(37.8)	<身体的自己評価>	
短大・専	28(14.9)	健康状態	
大学	40(21.3)	劣っている	22(11.7)
その他	10(5.3)	同じぐらい	73(38.8)
収入(万円)		優れている	93(49.5)
250未満	13(6.9)	体力レベル	
250-349	38(20.2)	劣っている	22(11.7)
350-449	23(12.2)	同じぐらい	74(39.4)
450-549	18(9.6)	優れている	92(48.9)
550-749	25(13.3)	運動能力	
750-	59(31.4)	劣っている	23(12.2)
その他	12(6.4)	同じぐらい	73(38.8)
所属グループ		優れている	92(48.9)
グランドゴルフ	46(24.5)		
硬式テニス	37(19.7)		
ゴルフ	51(27.1)		
生涯学習	54(28.7)		

状態「体力レベル」「運動能力」のいずれにおいても、約半数の者が同年代の人よりも「優れている」と答え、自己の健康体力に対する自信が窺える。

これらの結果、運動・スポーツ参加には比較的積極的に、自己の身体的自己評価においても、肯定的評価を呈している。

2) 生活満足度

つぎに、生活満足度について見てみる。20項目のLSIについて、合計得点が20点満点となるよう数量化して、全体及び5つの要因ごとに合計得点を算出した。表4・5にその結果を示している。ここでは、全体的な傾向と性別、年齢別に生活満足度の違いを検討していく。

全体の平均値は、20点満点中9.30という値を示している。すなわち、LSIAで測定されたサンプルの生活満足度はほぼ正規分布した平均的得点を

示している。5つの要因についてみてみると、「興味・関心」の平均値は6項目の合計得点の6点満点中3.64を示し、日常生活における活動に対する興味や関心に対してやや高い満足感を持った状態にある。次の「決意と不屈の精神」では、6項目の合計得点の6点満点中2.27にとどまった。この要因は、現在の生活の意義を認め、その生活に対する計画性への執着と継続性を表す要因であり、肯定的評価に対しては、平均より低い値を示している。3番目の「目標達成に関する期待と現実の一致」は、自分の目標を達成する際に成功感を感じているかどうかを示す要因である。3項目の合計得点の3点満点中のスコアは1.16であり、これも低い平均点であった。「積極的な自己概念」でも3項目の合計得点の3点満点中0.92を示したにとどまった。そして最後の「気分状態」では、2点満点中1.31という値を示している。これらの

表4 生活満足度指標 (LSI) 平均得点

LSIA 項目	平均値	S.D.	レンジ	Cronbach's α
全体	9.30	3.98	0-18	0.75
要素別				
1. 興味・関心	3.64	1.42	0-6	0.59
2. 決意と不屈の精神	2.27	1.47	0-6	0.49
3. 目標達成(期待と現実)	1.16	1.04	0-3	0.54
4. 積極的な自己概念	0.92	0.90	0-3	0.32
5. 気分状態	1.31	0.73	0-2	0.33

表5 性別・年齢別生活満足度指標 (LSI) 平均得点

	LSI 平均得点	Prob. (t-test及びONEWAY)
性別		
男性	8.53	p<0.001
女性	11.05	
年齢		
45-54歳	11.31	P<0.01
55-64歳	8.97	
65歳以上	8.85	

LSI 要因群別結果からは、これまでの自己の興味や関心に基づいた人生評価と現在から過去を振り返った自己の選択結果や気分状態については、やや肯定的な評価を示しているものの、他の3要因については必ずしも高くない。

これら LSI 20 項目の尺度の信頼性検定 (releability test) では、クロンバックのアルファ係数が0.75と比較的高い値を示した。

次に、表5に示すように男女別に生活満足度を比較してみると、20項目の合計得点の平均値は男性が8.53に対して女性が11.05を示し、女性の生活満足度の方が高いことがわかる。これらの平均値を、t検定によって有意差の検定を行ったところ、0.1%水準で有意であった。

年齢別比較では、45-54歳までの中年者の平均値が11.31で他の年代に比べて高い値を示している。一元配置分散分析においても、1%水準で有意差が見られた。

3) 生活満足度の規定要因

生活満足度を規定する要因を明らかにするため、LSI のトータルスコアを外的基準とし、他の変数を説明変数とした林の数量化I類を用いて分析した。表6は、その結果を示している。

まず、独立変数全体での規定力の強さを表す重相関係数 (R) は、0.634を示した。また、各要因ごとの重相関係数を見てみると、それぞれ、属性 (人口統計学的要因) が0.422と最も大きな値を示し、次いで、健康体力評価 (0.415)、運動・スポーツ実施 (0.264) の順であった。

次に各カテゴリースコアのレンジと偏相関係数に着目し、各アイテムの規定力を検討した。レンジが最も大きかったのは、「所属グループ」で6.27であり、グループ所属へのアイデンティティが強く影響をしていると考えられる。生涯学習サークル参加者の LSI が最も高く、次いでグラウンド・ゴルフの順であった。次にレンジが大きいのは「運動実施頻度」で3.60を示し、カテゴリースコアは定期的な運動を実施している者ほどが高い。

3位の年齢のカテゴリースコアでは、退職前の

45-54歳の中年の満足度が高く、4位の性別では、女性が高いなど前述した生活満足度の平均値の結果と同様であった。また、健康や体力に関する自己評価も優れているもの程カテゴリースコアが高く、全体の中では5位と7位となっている。そして、世帯収入が6位となっている。これら上位項目は偏相関係数も高く、強い規定力を持つことが推察される。

すなわち、人口統計学的要因では、男性よりも女性が、高齢者よりも中年者の方が、そして世帯収入が中程度か高いグループで、生涯学習サークルなどで幅広く活躍している方が生活満足度が高いと考えることができる。

また、身体的自己評価では、自信のある肯定的評価群が、また、体力づくり保持のためのフィットネス運動の習慣性のある人ほど LSI 評価が高いといえる。

全体的な生活満足度を規定する要因においては人口統計学的要因の年齢、性、経済的要因などの関連要因が見られた。運動・スポーツ関連要因では、運動実施と健康体力評価が生活満足度に強い影響を及ぼしていると考えられる。

4) 生活満足度を規定する要因の性差

生活満足度を規定する要因を、男女別に示したのが表7である。重相関係数は、男性が0.580、女性が0.862で、今回分析に用いた独立変数では、女性の方が規定力が強いことがわかる。それぞれについて詳しく検討してみよう。

まず、男性では「所属グループ」が、偏相関係数で最大値を示し、次いで健康状態、世帯収入、運動実施、年齢の順となっている。

女性のサンプル数も小さいが全体的に見てどの項目も高い偏相関係数を示している。なかでも最も偏相関の値が高かったのは運動・スポーツ実施種目で、内容的には、フィットネスプログラムへの参加が強く規定力を持っている。運動・スポーツ実施種目以外は、男性とほぼ同様の傾向を示している。

このように、男性では、個人的属性と運動・スポーツ実施要因の規定力が強く、他方女性におい

表6. 数値化1類による生活満足度に影響を及ぼす要因の分析

アイテム	カテゴリー	スコア	レンジ	偏相関	順位 (レンジ)	R (要因群)	R (ステップワイズ)
<属性>						.422	.422
性別							
	男性	-.95	3.07	.25	4		
	女性	2.12					
年齢							
	45-54歳	2.69	3.38	.29	3		
	55-64歳	-.33					
	65歳以上	-.69					
職業形態							
	常勤	.68	1.70	.11	9		
	退職	.10					
	主婦	-1.02					
	その他	-.07					
学歴							
	小中学	-.90	1.44	.14	10		
	高校	.02					
	短大・専	.54					
	大学	.44					
	その他	.08					
世帯収入							
	250 万未満	-.82	2.79	.23	6		
	260 -349 万円	-.67					
	350 -449 万円	-1.59					
	450 -549 万円	1.20					
	550 -749 万円	-.00					
	750 万円以上	.87					
	その他	-.03					
所属グループ							
	グラウンドゴルフ	.09	6.27	.38	1		
	硬式テニス	-3.15					
	ゴルフ	-1.09					
	生涯学習	3.12					
<現在の運動・スポーツ実施>						.264	.515
運動・スポーツ種目							
	フィットネスプログラム	0.26	.03		12		
	スポーツ	-.03					
	その他	.09					
運動実施 (フィットネス)							
	週に3回程度	-.17	3.60	.24	2		
	週に1~2回程度	.34					
	2~3週間に1回	.43					
	1年に6~12回程度	.56					
	1年に3~5回程度	-3.04					
	ほとんどしなかった	-1.18					
スポーツ実施							
	週に3回程度	-2.24	2.48	.20	8		
	週に1~2回程度	1.07					
	2~3週間に1回	-.06					
	1年に6~12回程度	-.74					
	1年に3~5回程度	-.01					
	ほとんどしなかった	-1.41					
<身体的自己評価>						.415	.634
健康状態							
	劣っている	-.59	3.01	.33	5		
	同じくらい	-1.66					
	優れている	-1.22					
体カレベル							
	劣っている	1.35	2.55	.13	7		
	同じくらい	-2.13					
	優れている	.12					
運動能力							
	劣っている	.42	0.94	.05	11		
	同じくらい	-.78					
	優れている	-.16					
	劣っている	-.07					

ては、ほとんどの独立変数の説明力が男性に比べ高いことを示している。

これらの結果から、男性の場合、生活満足度が高いのは、生涯学習群の影響力で中年層で、世帯収入が高く、自己の健康に自信を持っており、定期的な運動・スポーツ活動を行っている者であるとまとめられよう。

一方、女性は運動実施群で、月に2-3回若しくは週1-2回程度の定期的な運動習慣を持った、自己の健康評価の高い層の生活満足度への規定力が高いことを示している。

以上分析結果について述べてきた。これまでの研究で生活満足度を規定する要因としては、個人的属性（人口統計的、社会経済的）、運動・スポーツ実施、自己の健康体力評価などが主要な要因として上げられてきた。さらに Ragheb (1980), Kelly (1987, 1988), Guinn (1980), Brawn and Frankel (1993)らは中高年者の生活満足において、それらの要因とは別に、レジャー参

加の頻度や満足度がより生活満足度に影響を与えることが提示されている。

今回の研究では、レジャー参加の頻度や満足度については調査内容としてとりあげていない。また、サンプルがスポーツサークル及び生涯学習サークル参加者と限定されているため、そのスポーツの実施や余暇活動においても、比較的に活発な特性をもっているものと思われる、こうした点について先行研究の結果との論議には限界がある。

性差については、年齢に正の相関的に強く影響される結果は、Brawn and Frankelら (1993)の研究結果と同じ傾向を示している。また、全体傾向では比較的规定力が強かった運動・スポーツ実施については、健康の自己評価と関連が強いものと考えられる。

これらの結果について仮説の検証をしてみると、仮説1については、人口統計学的・社会経済的要因の重相関係数=0.422と他の独立変数群よ

表7 性別にみた生活満足度に影響を及ぼす要因の分析

要因群	男性 n=130		女性 n=47	
	Partial r	R	Partial r	R
	全変数	.580		.862
	ステップワイズ*			
<属性>		.303		.617
年齢	.197		.525	
職業形態	.175		.325	
学歴	.154		.337	
世帯収入	.312		.622	
所属グループ	.404		.540	
<現在の運動・スポーツ実施>		.452		.818
運動・スポーツ種目	.135		.634	
運動実施	.277		.524	
スポーツ実施	.191		.539	
<身体的自己評価>		.580		.862
健康状態	.332		.391	
体力レベル	.085		.096	
運動能力	.068		.401	

りも強かった。

仮説2については、男性重相関係数=0.580に比べ女性重相関係数=0.862と女性の説明力が高く、規定要因間にも顕著な性差がみられた。

仮説3については、フィットネスとしての運動・スポーツ実施頻度などの量的変数の説明力は全体で2番目(レンジ3.60)に強く、また、第5番目に健康体力評価(レンジ3.01)などの質的要因にも強く影響されているなど、仮説1, 2, 3のすべてが実証された。

5. 結 語

本研究の目的は、都市に在住する中高年者の生活満足度に及ぼす運動・スポーツ参加要因を明らかにするとともに、QOL研究の社会学的研究指標についての応用の可能性について検討することであった。高齢者の質問紙調査による研究結果は、次のようにまとめられる。

- 1) 生活満足度は、個人的属性(人口統計, 社会経済的要因と身体的自己評価によって強く影響され、さらに、フィットネスとしての運動習慣によっても規定される。
- 2) 生活満足度について男性と女性とを比較したところ、都市においては、男性よりも女性の方が高い満足度を示した。女性の方が日常生活における興味や関心の領域が広く、現在の生活に積極的に取り組んでいることが示唆された。
- 3) 生活満足度を規定する要因は、男女間で異なることが明らかになった。独立変数全体での規定力は女性の方が高いことが示され、特に、女性では健康や体力に対する自己評価やスポーツ実施頻度の規定力が男性に比べて高いことが明らかとなった。

今回の調査対象は、都市におけるケーススタディであるため一般的な傾向とは言えない部分もある。しかしながら、農村のよりも社会的相互作用の機会が多くみられる都市の中高齢者にとって、運動・スポーツの機会や参加が生活満足度への影響力を少なからず持っていることが示された。さらに、本研究は生活満足度指標(LSI)の

適用により、QOLとスポーツ・レジャー参加との関連を明らかにできることへの可能性を示唆している。

謝 辞

垂水区団地スポーツ協会及び垂水区内の他の団体調査において、垂水区団地スポーツ協会創設者のひとりである蓮沼良造氏に多大なご協力を賜った。ここに心より感謝する次第です。

文 献

- Brawn B.A. and Frankel B.G., 1993, "Activity Through the Years: Leisure, Leisure Satisfaction, and Life Satisfaction", *Sociology of Sport Journal*, 10, 1-7.
- Guinn R., 1980, "Life Satisfaction Correlates of Leisure Satisfaction", *Journal of Leisure Research*, 12 (3).
- 金子勇, 松本光., 1986『クオリティ・オブ・ライフ現代を知る』, 副村出版。
- Kelly J.K., 1987, "Later-Life Satisfaction-Does Leisure Contribute?-", *Leisure Sciences*, 9, 189-200.
- Kelly J.K. and Ross J.E., 1988, "Later-Life Leisure-Beginning a New Agenda-" *Leisure Sciences*, 11, 47-59.
- Neugarten, B.L., Havighurst, R.J. and Tobin, S.S., 1961, "The Measurement of Life Satisfaction", *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- 松浦佳行, 川西正志, 池田勝, 会田勝., 1993, 「中高年者のスポーツ参加と生活満足度に関する研究」, 『日本体育学会第44回大会号』, 142
- 宮内孝知, 嘉土脩, 菊幸一, 長見真, 雨宮輝也., 1992, 「中高年スポーツ参加者の現状と問題-第43回全国スポーツ・レクリエーション祭参加の調査から-」, 『日本体育学会第43回大会号』, 168.
- 文部省体育局生涯スポーツ課., 1989, 『全国スポーツレクリエーション祭に関する参加者の意識調査報告書』.
- Ragheb M.G. and Griffith. C. A. 1980, "The Contribution of Leisure Participation and Leisure Satisfaction to the Life Satisfaction of Older Persons", *SPRE Research Symposium National Recreational Park Association*.
- Russel R.V., 1987, "The Importance of Age-segregated Retirees", *Journal of Leisure Research*, 19 (4), 273-283.

- 岳藤史泰, 山口泰雄., 1992, 「高齢者の余暇活動とクオリティ・オブ・ライフに関する研究」, 『自由時間研究』, 92(12), 102-111.
- 山口泰雄., 1991, 「第3回全国スポーツ・レクリエーション祭参加者調査報告書」, 『平成2年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書』.
- 山口泰雄., 1992, 「地域活性化におけるスポーツイベントの社会経済的研究」, 『平成3年度文部省科学研究費(一般研究C)研究成果報告書』.
- 山口泰雄, 野川春夫., 1993, 「種目別にみた“ねんりんピック”参加者のイベント評価と社会化過程」, 『体育・スポーツ科学』, 2:43-53.
- 財団法人日本体育協会., 1992, 「NoⅦ中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究-第1報」, 『平成3年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告』.
- 財団法人日本体育協会., 1993, 「NoⅧ中高年者のスポーツ参加に関する社会学的・心理学的研究-第2報」, 『平成4年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告』.